

パニウム - ナンバー・ナイン

四行目

Jeff Pippenger

2025-04-01

南の王は激怒して出陣し、彼、すなわち北の王と戦う。北の王は大軍を繰り出すが、その大軍は南の王の手に渡される。南の王がその大軍を打ち破ると、彼の心は高ぶり、幾万の者を打ち倒す。しかし、それによって彼は強められはしない。ダニエル書 11:11、12

第11節と第12節は、プーチンがウクライナと欧州連合（EU）に勝利すること、そしてウクライナ戦争での勝利後にプーチンにもたらされる余波と影響を、紀元前217年のラフィアの戦いにおけるプトレマイオスの勝利と、第12節における彼の没落として表している。これらの節のテーマは、南の王の興亡である。

これまでの記事では、第11章の預言の基本的なテーマを特定してきました。本章を先に進める前に、第11節についてはもう少し時間をかける必要があります。ダニエル書11章11節は、黙示録11章11節と一致しています。

三日半ののち、神からのいのちの霊が彼らのうちに入り、彼らは立ち上がった。彼らを見た者たちには大きな恐れが臨んだ。黙示録 11:11

2023年、底なしの淵から上ってきた獣に殺されていた二人の証人が自らの足で立ち上がった。共和党の角の証人は、2015年にドナルド・トランプが大統領選への出馬を表明したことで始まり、2020年には、世界のグローバリストによって表象される竜と、民主党のグローバリストが共和党内のグローバリスト（RINO）と結託して選挙を盗み、ジョー・バイデンを据えることで、通りでドナルド・トランプを殺した。Future for Americaというミニストーリーによって表されるプロテスタントの角は、イスラムによるナッシュビルへの攻撃を予告する誤った予言を広めることによって殺された。2023年、共和党の角とプロテスタントの角はともに復活した。十一節は、2014年に始まるウクライナ戦争を、プーチンとロシアの最終的勝利に至るまで示している。

第十一節は、アドベンチズム全体にとって、また9/11の光と第三の災いの到来を受け入れた者たちにとっても、裁きにおいて頂点に達する視覚的な試験であるが、主としては、2023年7月以来段階的に封印が解かれてきた予言の光に照らして責任を問われることになる者たちのためのものである。

アドベンチズムの指導部は1989年に退けられたが、これはその預言的期間におけるキリストの誕生によって予表されている。キリストのバプテスマのとき、主はキリスト教会の「土台」となる弟子たちを召し始め、こうして9/11を予表した。すなわち、第三の災いのイスラムの到来とともに、主はご自身の民をエレミヤの「古い道」へと導き戻されたが、それはアドベンチズムの基礎を表している。9/11に、生ける者の裁きが神の家から始まり、アドベンチズムは、ユダヤ人がイエスをメシアとして退けたのと同じ確かさで、黙示録18章の天使の光を退けた。黙示録18章の天使の光を受け入れた者たちは、その後、20

20年7月18日の失望によって試みられた。

2023年7月に、ダニエル書11章11節の光は、外的な現在の真理のラインを明らかにした。ダニエル書11章11節に見いだされるその外的な預言的成就の光は、黙示録11章11節においてよみがえった乙女たちに開かれた。黙示録は、ダニエルが外的な歴史として明らかにする内的な歴史を、外的な歴史として特定している。

2023年7月から開かれた光に目を向けてきた者たちは二つの明確に異なる部類に分かれる。というのも、2023年7月以降に一緒に歩んでいた者たちの中に、すでに今は共に歩まなくなった者がいるからである。裁きは段階的であり、9/11からセブンスデー・アドベンチスト教会には、1863年以降段階的に退けてきた「ミラーとその同労者たちが採用した予言解釈の規則」を退けたことを悔い改める「時」が与えられた。9/11から2020年7月18日まで、セブンスデー・アドベンチスト教会には最終的な悔い改めの機会が与えられ、その時点で2020年のナッシュビルの宣言に参加していた者たちが試された。7月には、浄化の最終段階は、ダニエル書と黙示録の第11章11節によって表されている。

この試験の過程において、三つの試験のうち第二の試験が行われる。第二の試験は視覚的な試験であり、その前には食欲の試験があり、そしてその締めくくりとなる第三の試験は、前の二つとは異なり試金石である。乙女たちが真夜中に「見よ、花婿が来る」という呼び声で目を覚ますと、一方の組は必要な油を持っており、もう一方は失われる。ミラー派はまさにこの経験を体現し、そのことによって、外的および内的な預言の流れの双方に対する理解を示した。

彼らが、墮落したプロテスタント教会をバビロンの娘たちであると特定することによって第二の天使のメッセージを宣べ伝えたとき、彼らは自分たちの経験の外にあるメッセージを宣言していた。真夜中の叫びのメッセージを告げ知らせるためには、まず自分たちこそが、待機の時にあった乙女たちであると自覚する必要があった。ダニエル書11章11節と黙示録11章11節において、内的なメッセージと外的なメッセージが、2023年7月以来、現在の真理として開かれてきた。

ダニエル書第1章では、第二の視覚的な試験は、ダニエルと三人の勇士の顔色が、バビロンの食事を食べた者たちよりも「見た目」においてより良く、肉付きもより良いと認められたときに示された。第2章では、その視覚的な試験は、最終的に聖書預言の諸王国の像であることが明らかにされる隠されたメッセージを正しく解釈することを求める、預言的な試験として示されている。ダニエル書の第1章、第2章、第3章は、黙示録第14章の第一の天使、第二の天使、第三の天使を表している。

黙示録14章の第二の天使は、ミラー派の歴史における外面的なメッセージを扱っており、また、ダニエル書2章も、預言的歴史における獣たちの像によって外的な線を描いている。第1章における視覚的な試験は、ダニエルと三人の勇士に基づいており、それゆえ内的な線である。ダニエル書1章から3章と黙示録14章の三天使との並行関係によって表される預言の外的線と内的線は、ミラー派によって成就した第二の天使のメッセージに対するもう一つの証しとなる。

ミラー派は、真夜中の叫びの宣言を成就したとき、外的なメッセージと内的なメッセージの双方を宣べ伝えた。彼らの外的メッセージは黙示録十四章の第二の天使であり、こうしてミラー派のメッセージは第二の天使とダニエル書二章の像とに直接結び付けられた。その像は、聖書の預言における外的な諸王国を、古代バビロンから、人類の恩恵期間の終わりにその終局を迎える現代のバビロンに至るまで表している。ミラー派は再び、バビロンに関する外的メッセージと結び付く。ダニエルの視覚の試練は、彼が選択した食事に基づいていた。そして、地に片足、海にもう片足を置いて降りてきた黙示録十章の第一の天使は、開かれた小さな巻物を手にしており、それをヨハネは食べるよう命じられた。第一の天使は食欲によって表され、その後視覚の試練が続く。その視覚の試練は、内のおよび外的な真理の筋道を含んでいる。

ダニエル書11章11節は、ヨハネの黙示録11章11節と並行して、二重の視覚的テストを表している。このテストは、乙女たちが油を持っているかどうかを明らかにするリトマス試験の段階で完結する。その現れは、米国における日曜法の際の猶予期間の終結の直前に起こる。日曜法における猶予期間の終結は、1844年10月22日に予表されていた。1844年10月22日の直前、1844年8月17日に、ミラー派は米国の東海岸一帯に津波のようにそのメッセージを広めた。

1989年は、ダニエル書の封印が解かれた「終わりの時」であり、ダニエル書の封印が解かれると、いつも知識が増し加わり、それによって礼拝者は二つの階級に分かれる。1989年は、1798年に第一の天使が到来したことによって型示された、三つの試練の道標の最初である。1840年8月11日に第一の天使が降臨したとき、それは9/11に降臨する黙示録18章の天使を象徴していた。ミラー派の歴史における最初の失望は第二の天使の到来を示し、2020年7月18日と遅延の時の始まりを型どった。ミラー派は、第二の天使のメッセージと、自分たちが十人の乙女のたとえの乙女であることに、次第に目覚めていった。1844年8月のエクセターのキャンプ集会で、彼らは完全に目覚めた。真夜中の叫びのメッセージの封印が段階的に解かれ始めた2023年7月に、十四万四千人は目覚めた。

エクセターにおいて、ミラー派の「待機の時」は終わった。それは、イエスがラザロをよみがえらせ、ラザロがキリストの働きを掉尾を飾る「印」となったときに、ラザロの家族にとって待機の時が終わったのと同様である。ラザロの復活は、待機の時が終わりと、神の民に印が押されることを画する。その後の凱旋入城は、ミラー派の歴史における「真夜中の叫び」メッセージの宣言を象徴していた。ダニエル書11章11節の主題は南の王の興亡であり、それは13節から15節におけるパニウムの戦いへとつながっていく。これらの節は、16節で旗印として高く掲げられることになる男女の額に印が押される場所であり、そのための試金石である。

第十五節はパニウムの戦いで成就し、それはキリストのカイサリア・フィリピ訪問と符合する。そのカイサリア・フィリピで、キリストはシモン・バルヨナの名をペテロに改め、十四万四千人の封印のしるしとなった。その時から、まもなく来る十字架の光が弟子たちに開かれた。キリストが十字架の直前にシモンの名をペテロに改めたとき、それはエクセターとラザロのリトマス試験と一致し、それがエルサレムへの凱旋入城へと導いた。8月12日から17日までのエクセターのキャンプ集会は、ダニエル書と黙示録の第11章における、日曜法という地震に当たる揺り動かしの前に、真理への最終的な定着を象徴して

いる。

バトルクリークでの働きも同じやり方で進められている。療養所の指導者たちは不信者と交わり、多かれ少なかれ彼らを評議の場に受け入れてきたが、それは目を閉じて事に当たるようなものだ。彼らには、いつ何時私たちに何が降りかかるかを見抜く識別力が欠けている。絶望、戦争、流血の霊があり、その霊は時の終わりに至るまで勢いを増していく。神の民が額に印を押されるやいなや—それは目に見える印や標ではなく、知的にも霊的にも真理に落ち着き、動かされなくなること—神の民が封印され、揺り動かしに備えられるやいなや、その揺り動かしはやって来る。実際、それはすでに始まっている。神の裁きは今やこの地に臨んでおり、私たちに警告を与え、何が来ようとしているのかを知ることができるようにするためである。『Manuscript Releases』第10巻、252頁。

十四万四千人の封印は、エクセターのキャンプ集会、キリストがシモンの名をペテロに変えた出来事、そしてラザロの復活によって表されていた。その復活は、黙示録11章における二人の証人の復活を予表している。10節から16節は、40節の隠された歴史を表している。40節の隠された歴史の封印が解かれることは、11節の歴史的成就とウクライナ戦争の中で始まった。2023年7月以降、その隠された歴史はユダ族の獅子によって封印が解かれつつある。

黙示録11章11節で十四万四千人に数えられる者となる候補者たちがよみがえらされたとき、日曜法において恩恵期間が閉じる前に合格しなければならない、ホワイト姉妹が獣の像の試験と呼ぶ視覚的な預言的試験が始まった。

主は、猶予期間が終わる前に獣の像が形成されることを、私にはっきりと示してくださった。というのも、それが神の民に対する大いなる試練となり、それによって彼らの永遠の運命が決定されるからである。あなたの立場は矛盾だらけの寄せ集めであり、欺かれる者はごくわずかだろう。

黙示録13章において、この主題は明確に示されている。[黙示録13章11-17節、引用]

これは、神の民が印を受ける前に必ず通らなければならない試練である。神の律法を守り、偽りの安息日を受け入れることを拒むことによって神への忠誠を証明したすべての者は、主なる神エホバの旗印のもとに列し、生ける神の印を受けるであろう。天来の真理を放棄して日曜日の安息日を受け入れる者は、獣の刻印を受けるであろう。Manuscript Releases 第15巻、15。

外的な預言の流れは、ダニエル書11章11節に描かれた歴史において封印が解かれ、内的な流れは黙示録11章11節において封印が解かれる。外的な流れは、生ける者の審判の期間中に、教会と国家の結合であって、その関係において教会が主導権を握る形を表す「獣の像」がどのように形成されるかを示す。内的な流れは、生ける者の審判の間に、神性と人性の結合を表す「キリストの像」がどのように形成されるかを示す。

第三の天使と十四万四千人の改革運動は、ダニエル書11章10節に示されているとおり、1989年の終わりの時に始まった。その後、ダニエル書12章の完全な成就が始まった。

彼は言った。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封印されている。多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者がいない。だが、賢い者は悟る。」ダニエル書 12:9、10

第十一章の十節は、「清めの過程」の始まりを示しており、それは第一の天使が「神を恐れよ」と告げることによって表現されている。十一節と十二節は、十四万四千人が白くされる場を表している。ゼカリヤ書がその経験を明らかにしている。

彼は私に、大祭司ヨシュアが主の使いの前に立ち、彼に敵対するためにサタンがその右に立っているのを見せた。すると主はサタンに言われた、「サタンよ、主がおまえを叱責する。エルサレムを選ばれた主が、おまえを叱責する。これは火の中から引き抜かれた燃えさしではないか。」さてヨシュアは汚れた衣を着て、主の使いの前に立っていた。主の使いは彼の前に立っている者たちに答えて言った、「彼からその汚れた衣を取り去れ。」さらに彼に向かって言った。「見よ、わたしはおまえの咎を取り去った。おまえに新しい衣を着せよう。」そこで私は言った。「彼の頭に清いターバンを載せよ。」こうして彼らは彼の頭に清いターバンを載せ、彼に衣を着せた。主の使いはそばに立っていた。ゼカリヤ 3:1-5。

この一節は、大祭司としてのキリストの最後の働きにおいて成就し、十四万四千人の封印を表している。

「ゼカリヤが見た、ヨシュアと御使いの幻は、大いなる贖罪の日の終幕における神の民の経験に、格別の力をもって当てはまる。残りの教会は、そのとき大いなる試練と苦悩に直面する。神の戒めを守り、イエスの信仰を保つ者たちは、竜とその軍勢の怒りを浴びるであろう。サタンは世界を自分の臣民と見なしており、キリスト者であると称する多くの人々さえ支配下に置いている。しかしここに、彼の覇権に抗している小さな群れがいる。もし彼が彼らを地上から消し去ることができるなら、彼の勝利は完全なものとなるだろう。彼が異教の諸国民を動かしてイスラエルを滅ぼさせたように、近い将来、彼は地上の悪しき権力を扇動して神の民を滅ぼさせるであろう。人々は、神の律法に反する人間の布告に服従することを求められるようになる。」

『預言者と王』、587。

「大いなる贖罪の日の終幕の場面」とは、まず最初に十四万四千人が封印され、その後現在バビロンにいる神のほかの子らも封印されることである。

神の民が御前で自分の魂を苦しめ、心の清さを嘆願するとき、「汚れた衣を取り除け」との命令が下され、また励ましのことばが語られる。「見よ、わたしはあなたの咎を取り去った。あなたを新しい衣で装わせる」。ゼカリヤ書 3:4。キリストの義の汚れなき衣が、試練と誘惑にさらされながらも忠実であった神の子らに着せられる。蔑まれていた残りの者たちは栄光の装いをまとい、もはや世の墮落によって汚されることはない。彼らの名は小羊のいのちの書にとどめられ、あらゆる時代の忠実な者たちの中に名を連ねる。彼らは欺く者の策略に抗い、竜の咆哮によってその忠誠をくつつがえされることはなかった。今や彼らは誘惑者の企みから永遠に守られている。彼らの罪は罪の元凶に移される。「清いターバン」が彼らの頭に載せられる。

サタンが自らの訴えを押し立てている間も、目に見えぬ聖なる天使たちは行き巡って、忠実な者たちに生ける神の印を押ししている。彼らこそ、小羊とともにシオンの山に立ち、その額には御父の名が記されている者たちである。彼らは御座の前で新しい歌を歌う。その歌を覚えることができるのは、この地から贖い出された十四万四千人のほかにはいない。「彼らは、小羊がどこへ行かれるにも従って行く者たちである。彼らは人々の中から贖い出され、神と小羊にささげられる初穂とされた者たちである。彼らの口には偽りが見いだされず、神の御座の前で傷のない者たちである。」黙示録 14:4, 5.

今や、天使の言葉は完全に成就した。「大祭司ヨシュアよ、今聞け。あなたと、あなたの前に座っているあなたの仲間たちよ。彼らはしるしとなる人々である。見よ、わたしはわがしもべ『若枝』を来たらせる。」（ゼカリヤ 3:8）キリストは、ご自分の民の贖い主、解放者として現される。まことに今や、残りの者は「しるしとなる人々」となる。彼らの巡礼の涙と屈辱は、神と小羊の御前での喜びと誉れに取って代わるからである。「その日、主の若枝は麗しく栄え、地の実りはイスラエルの逃れた者たちにとって優れて美しいものとなる。シオンに残る者、エルサレムにとどまる者は、エルサレムの生ける者の中に名を記された者は皆、聖と呼ばれるようになる。」（イザヤ 4:2、3）『預言者と王たち』591、592頁。

封印は、ダニエルの「清められ、白くされ、試みられる」の第二段階である。11節と12節は、13～15節のパニウムの戦いに先立つ、預言上の南の王であるロシアの最終的な興亡を示している。大贖罪日の終幕の場面において、十四万四千人は、キリストによってその汚れた衣を取り除かれると、「清い冠」を受ける。これは、緋色の衣と金の鎖とともに与えられた、ダニエルの第三位の統治者への昇進を意味する。それはまた、ヨセフが金の鎖を賜り、第二位に昇進し、王の指輪を授けられたことでもある。その「指輪」は、支配者が自らの法に押印するために用いた王の印璽を表している。

ダリウスは自分の印章で、ダニエルが獅子たちの中に入れられた穴を封印した。

そこで王は命令を下し、彼らはダニエルを連れてきて、獅子の穴に投げ込んだ。王はダニエルに言った。「あなたが絶えず仕えているあなたの神が、きっとあなたを救い出してください。」そして一つの石が運ばれてきて、穴の口に据えられ、王はそれを自分の印章と重臣たちの印章で封じ、ダニエルに関する定めが変えられないようにした。ダニエル書6章16、17節。

「印章」と訳されるヘブライ語はストロング番号H5824で、H5823に対応する語根に由来し、（刻まれた）印章の指輪を意味する。御使いの前に立つヨシュア、獅子の穴のダニエル、ファラオの前のヨセフは、十四万四千人の封印を表している。これはダニエル書12章における第二の試練であり、清められた者たちが「試される」前にさらに「白くされる」段階である。これらの筋は、「シェアルティエルの子」ゼルバベルによっても表される。

その日、万軍の主は言われる。わたしはわがしもべ、シェアルティエルの子ゼルバベルよ、と主は言われる。わたしはあなたを取って、あなたを印璽のようにする。わたしはあなたを選んだからである、と万軍の主は言われる。ハガイ書 2:23。

ゼルバベルという名は「バビロンの子孫」を意味し、彼の父はシェアルティエルで、その名は「神に願い求めた」を意味する。ゼルバベルは、終わりの時にバビロンの子孫を神の群れへと呼び入れる第二の天使のメッセージを表している。バビロンから最後の子孫を呼び出す十四万四千人には「祈り」という要素が結び付いている。というのも、そのリバイバルは祈りによってのみ起こるからである。

私たちの間に真の敬虔の復興が起こることこそ、私たちのあらゆる必要の中で最大にして最も緊急のものである。これを求めることを第一の務めとすべきである。主の祝福を得るためには熱心な努力が必要である。これは、神が私たちにその祝福を授けようとしておられないからではなく、私たちがそれを受け備えができていないからである。天の父なる神は、地上の親がその子どもに良いものを与えるよりもなおいっそう、神に求める者にご自分の聖霊をお与えになろうとしておられる。しかし、告白とへりくだりと悔い改め、そして切なる祈りによって、神が私たちにその祝福を授けると約束しておられる条件を満たすことは、私たちの務めである。

復興は、祈りへの応答としてのみ期待できる。人々が神の聖霊にこれほど乏しい間は、神の御言葉の説教の価値を理解することができない。しかし、聖霊の力が彼らの心に触れるとき、語られる説教はむなしく終わることはない。神の御言葉の教えに導かれ、その聖霊の現れのうちに、健全な思慮を働かせつつ、私たちの集会に出席する人々は尊い経験を得て、家に帰るときには、健全な影響を及ぼす備えができています。

古き旗手たちは、祈りのうちに神と格闘するとは何か、また御霊の注ぎにあずかる喜びがいかなるものかを知っていた。だが彼らは今、行動の舞台から退きつつある。では、その後を継ぐのはだれか。次の世代はどうだろうか。彼らは神に立ち返っているだろうか。私たちは天の聖所で進められている御業に目覚めているだろうか。それとも、私たちが奮い立つ前に、教会に何か強く迫る力が臨むのを待っているのだろうか。教会全体がリバイバルするのを見ることを望んでいるのだろうか。その時は決して来ない。

教会には回心していない人々がいて、熱心で力ある祈りに心を合わせて加わろうとしない者もいる。私たちは一人ひとりがこの働きに取りかからなければならない。私たちはもっと祈り、話すことを少なくしなければならない。不義がはびこっており、人々は、霊と力のない敬虔の形だけに満足してはならないことを教えられなければならない。もし私たちが、自分の心を探り、罪を捨て、悪しき傾向を正すことに熱心であるなら、私たちの魂は虚栄に高ぶることはない。私たちは自分自身を信頼しなくなり、私たちの力は神から来るのだということを常に意識するようになる。

『セレクトッド・メッセージズ』第1巻、121、122。

祈りという道標はダニエル書に示されており、第二章では外的メッセージを理解するための祈りが、また第九章では表されている内的メッセージを成就するための祈りが記されている。ゼルバベルとその父シェアルティエルは、第二の試験における十四万四千人の封印を表しており、それは獣の像に関する目に見える試験であると同時に、黙示録11章11節で表されている内的な試験でもあり、さらにダニエル書11章11節で表されている外的な試験でもある。

第11節については次回の記事で引き続き取り上げます。